# 技術教育過程における看護学生の情意領域の変化－学内演習後のレポート分析－


| メタデータ | 言語: Japanese |
| --- | --- |
| | 出版者: |
| | 公開日: 2018-10-31 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 尾﨑, 雅子, 藤原, 桜, 阿児, 馨, 西原, 詩子 |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | https://kobe-tokiwa.repo.nii.ac.jp/records/1015 |

4-P-9

# 技術教育過程における看護学生の情意領域の変化
## －学内演習後のレポート分析－

尾﨑雅子[1)]
藤原 桜[1)]　阿児 馨[1)]　西原詩子[1)]

情意領域は学生の能動的な学びのための原動力になると考えられている。本研究の目的は 1 年後期「基本看護技術 I （共通・生活援助）」の前後の職業アイデンティティ評価と学生が記述したレポート内容から学生の情意領域の変化について把握することである。職業アイデンティティは 74 名分を分析し、12 項目のうち自己関与に関する質問項目で得点が 1.03～1.07 倍上昇、「看護師の仕事に私は適している」の項目で有意な得点上昇があった（$p<0.05$）。レポートは 54 名分から演習体験から得た学びの記述箇所を抽出し、<事前学習、リフレクション・事後学習の意義を実感> <看護技術におけるコミュニケーションの意義><技術の方法や実施後の成果><患者の気持ちに気づく><相手に立場に立つこと><看護技術についての理解>などがあった。梶田はブルームらの教育目標のタキソノミーに、法華経の「開」「示」「悟」「入」を取り入れ、日本版タキソノミーを提唱している。今回の結果を情意領域の内容に照らしてみると、自らの体験から重要さや価値を実感し、価値づけや方向づけができている状態「悟」であると思われる。また職業アイデンティティからも看護について何らかの価値を見出せたことが伺える。ただ、今回は学生がお互いに役割を演じていたにすぎないので、各自の個性として定着し日常化していく「入」に至るためには、臨地実習などさらなる体験が必要だと考える。

1）保健科学部看護学科